

ちっちなサンタさん

紫 李鳥

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ママに会いたいジェニファーは眠れなくて、窓の雪を見つめていました。

# 目次

ちっちなサンタさん

—  
1



# ちつちやなサンタさん

クリスマスの夜。

ジェニフアーは、ママのことを考えると眠れなくて、ベッドの中から窓に降る雪を見つめていました。

窓から差し込むやわらかな外灯が、悲しげなジェニフアーの顔を映していました。そのときです。暖炉のほうから何か声がしました。

ジェニフアーはベッドから出ると、暖炉のそばに行きました。すると、

「いってて……」

と、暖炉の中からまた聞こえました。

でも、だれもいません。

「あく、痛かった」

今度は、ジェニフアーの近くから声がしました。

ジエニフアーは声がした足元に顔を近づけると、やっと、それを見つけました。

アイボリーのカーペットの上に、腰をさすっているイチゴ大のサンタがいました。

「煙突から落っこつてしまったわい」

「あなたは、だくれ？」

ジエニフアーは腹ばいになると、頬杖をついて聞きました。

「見てのとおりのサンタじゃ。ちつとばっかり小さいがな」

「どうして、ちっちゃいの？」

「話せば長くなる。そんな暇はないんじや。名前は？」

サンタはノートとペンを出しながら聞きました。

「ジエニフアー」

「うむ……いい名前じゃ。……三番地じゃったな。ちゃんとメモらんと、ボスに叱られ

るからな。で、何が欲しい？ 次の子どもが待つとるんじや。さあ、欲しいものを言って」

「……ないわ」

「なぬう？ ない？ 欲しいものがないと言うのか？」

「ええ。ないわ」

「欲しいものがない子どもなんておらん。オモチャとか人形とか、なんかあるじやろ？」

「だって、なんでももってるもん」

「うひゃー、かわいげのない子じや。じや、何か夢とか望みはあるじやろ？」

「おねがいごとはあるわ」

「なんじや？」

「……ママにあいたいの」

ジェニファーは寂しそうにうつむきました。

「どこにいるんじや？」

「とおいところにあるびょういん」

「やれやれ。子どもの望みを一つかなえてやらんと、ボスにこっぴどく叱られるからな。

仕方ない、そこにつれて行くよ」

「エッ！ほんと？」

ジェニファーは目を輝かせました。

「ほらほら、コートを着て。急いで」

ジェニファーは急いで赤いコートを着ると、白い毛糸の帽子を被り、ファーのついたブーツを履いて、白いミトンをしました。

「では、行くよ。目を閉じて、五つ数えて」

ジェニファーは目を閉じると、

「ワン、ツー、スリー……」

と、数えました。

すると、あつという間に、トナカイが二頭いるソリの中に座っていました。あたりを見回すと、ソリは大きな赤いものの上に載っていました。

白い綿帽子がその上に落ちていきます。

それは、雪でした。

ジェニファーはいつの間にか小さくなっていたのです。

「さあて、行くよ。しっかりつかまって。レッツゴー！」

トナカイの首につけた大きな鈴の音が響くと、ソリはみるみる上がって行きました。

「わあ〜」

ソリから見下ろすと、さっきの赤いのは、テラスにある鉢植えのポインセチアでした。街灯の光が、まるで惑星のように見えます。

ジェニファーのおうちがみるみる小さくなっていきます。

「どうじゃ、ソリの乗り心地は？」

「ソファーじゃないから、ちよつとかたいけど、わるくないわ」

「ま、客を乗せるのは初めてじゃから、要望は何かとあるじやろが、ちよつとだけ我慢し



ておくれ」

「うん、がまんする」

「長旅じゃから、わしが小さくなったわけを教えてやるよ」

「うん」

「あれは、わしがジエニファーと同じぐらいの歳じやった。」

クリスマスの日、ベッドに靴下をさげると、サンタのプレゼントを待つとった。すると、ドアが開いた。

絶対に見ちゃいけないよ、ってパパに言われとった。だが、わしはサンタを信じとらんかった。パパがプレゼントを入れてると思つとった。だから、見てしまった。

ところが、そこにいたのは、サンタの格好をした知らないおじさんじやった。オーラのような光がサンタを包んどった。わしがビツクリして目を見開いていると、

『見てしまったか……。サンタを信じない子どもはこうしてやる』

サンタはそう言うのと、白くて長いあごひげを何度か揉んだ。途端、わしは小さくなつとった。

大男のサンタを見上げて、

『たすけてーっ！』

て、叫んだが、身長は伸びんかった。

『どうだ、元に戻りたいか？』

『うん、もどりたい』

『では、戻るための修行をしよう。まず、サンタが本当にいることを信じることじゃ』

『うん』

『そして、わしのそばで一億年間修行する』

『……いちおくねん？』

『心配するな、一億年は人間の世界では一年くらいじゃから。それに、その間は時間が止まるから、一年後は、クリスマスのこの場面に戻る。

何をするかと言うと、サンタになって、地球の子どもたちにプレゼントを運ぶんじゃ。

そして、子どもたちに夢と希望を与えるんじゃ。

おまえのように、サンタを信じない子どもたちに、素直さや純粋さを忘れないように教えてやるんじゃ。分かったな？』

『……はい』

『じゃ、サンタに変身じゃ』

本物のサンタがまた、ひげを揉むと、あつという間にわしはご覧のとおりのおじいちゃんサンタになってしまったってわけさ」

「ふん」

「ふうん、て驚かんのか？」

「だって、いちねんしたら、もともどるんでしょ？そしたら、しようがつこうにまにあうでしょ？ほんとうのサンタさんは、ちゃんとかんがえてるのよ」

「うひゃー、かわいくない」

——ソリはたくさんの山や街を越え、もうすぐママのいる病院に着きます。

「あつ、みて。あのあかりがついてるおへやよ」

ジェニファーは、病院の窓の明かりに指をさしました。

「やっと着いたか。夜明けまでには次んちに行かんと、修行期間が延びるかも知れん。さあ、ドアの下から入ったら、目を閉じて五つ数えるんじや。そしたら、元の大きさに戻るから」

「うん」

ジェニファーは、駆け足でママの病室に忍び込みました。

サンタは時間を気にしながら、待合室の椅子の下でジェニファーを待っていました。

間もなくして、大きくなっているジェニファーが笑顔でやって来ました。

「ほら、椅子に隠れて。また、目を閉じて五つ数えて」

「うん。ワン、ツー、スリー……」

また小さくなったジェニファーは、ソリに座っていました。

「どうじゃった？ママは」

「はるになったら、おうちにかえられるんだって。みて、ママがつくつくってくれたかみかざりよ」

ジェニファーはコートのポケットから、ビーズのバレッタを出して見せました。

「おお、キレイじゃ。よかったのう」

「うん」

ジェニファーはうれしそうに、小さな前歯をのぞかせました。

「……サンタさん、ありがとう」

「なーに、ジェニファーの願いをかなえて上げられて、わしもうれしいよ。さあて、超特急で帰るぞ。次の子が目覚めます前にプレゼントをやらんとな——」

「ボスにこっぴどくしかられるんでしょ？」

「そのとおり。……なぬう？ハッハッハッハ！」

「うつふつ……」

朝日が遠くの山を染めていました。

目を覚ますと、ジェニファーはベッドにいました。

……ゆめをみてたの？……アツ！

ジェニファーは思い出したようにベッドから飛び降りると、ハンガーラックにかかったコートの手を入れました。

ママからもらったバレツタがありました。夢ではありませんでした。

「……サンタさん、ママにあわせてくれてありがとう」

ジェニファーは、ちっちゃなサンタさんから、大きな愛をプレゼントされました。

おわり